前期日程

令和６年度入学試験問題（前期日程）

国　　語

（教育学部）

――― 解答上の注意事項 ―――

1 「解答始め」の合図があるまで問題を見てはならない。

2 問題冊子１冊と解答紙２枚がある。

3 問題は３問ある。（すべての問題に解答すること。）

4 問題の解答は，解答紙の所定の解答欄に記入すること。

5 問題冊子は持ち帰ること。

令和６年度入学試験
問題訂正

○前期日程
○科目名　国語

訂正箇所１	誤	正
８ページ　注	最花……その日の最初の食物を神仏に供えること。	最花を参らせ……その日の最初の食物を神仏に供えること。

訂正箇所２	誤	正
９ページ　問二	・・・(２)このように言った理由を書きなさい。	・・・(２)このように思った理由を書きなさい。

一　次の【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】をよく読んで、後の問いに答えなさい。筆者はいずれもフランス文学を専門とする菅原百合絵である。（設問の都合上、原文を一部改めたところがある。）（50点）

【文章Ⅰ】クレリエール

「日本語を母語としているのに、なぜフランス文学を研究するんですか？」と尋ねられたことがある。十年以上前、ようやく文学を勉強しはじめた大学三年の夏。この質問をわたしにしたのは、才媛という表現がこの上なく似合う、理系畑の聡明な後輩だった。そのときどう答えたのか、今となっては思い出せない。しどろもどろに、当時感じていたフランス文学の魅力を伝えたような気がする。ただ、うまく答えられなかったなりに、それが重要な問いで、時間をかけて向き合うべき宿題だと直感的に感じたことだけはよく覚えている。

そう言われてみれば、たしかに外国文学を学ぶというのは奇妙なことだ。自国にもすぐれた作品は無数にあるのに、なぜか遠い国の言葉をわざわざ習得してものを読み、書こうとする。難解な構文をどう訳すか手を焼くたび、辞書を引きながら拙いフランス語でなんとか表現しようとして言葉に詰まるたび、じかに触れたいものにガラス越しにしか接近できないようなもどかしさが募る。少しずつ言葉を覚えるにつれてガラスは薄くなっていくが、障壁がなくなる日は決して来ない。

しかし、このガラスの壁は障害になっているだけではなく、わたしたちに世界を見る新しい方法を教えてくれもするのではないか。遅まきながらこのことを心底実感するに至ったのは、質問された時から何年も経ってからのことだった。外国語を学ぶことは、世界の見方が変容する経験を伴わずにはいない。たとえば、clairière（クレリエール）という言葉がある。これは「明るい、澄んだ、透けた」を意味するclairという形容詞からくる言葉で、森の中の木のまばらな空き地の部分や布地の薄い部分をあらわす。それまでただの「ひらけた土地」でしかなかった場所は、この言葉を知ることで、木々の葉を透かして空き地を照らす陽光のまばゆさと結びつくようになった。

母語でないテクストを読むときの「遅さ」それ自体に、欠点だけではなく意義[A]もあるのだ、ということを実感したのは、それ[B]よりもっとあとのことだった。たしかに、言葉の端々に宿る微細な意味の揺らぎやズレを感知する点にかけては母語話者のほうがずっと優れているかもしれない。けれども、ひとつずつ言葉を手繰りながら舐めるように繰り返し読む中でしか現れてこない文章の表情もある。「速く読みすぎても、遅く読みすぎても、何も分からない」というパスカル*の箴言は、外国語で文学作品を読む人にとって大いなる示唆を与えてくれるものでもある。

ひるがえって、外国語のフィルターを通すことで母語で書かれた文学作品の輪郭がより鮮明に見えてくることもある。[C]それを知ったのは、日本語を学ぶフランス人の友人と一緒にいくつかの日本語のテクストを読んだときだった。彼女がフランス語に翻訳した芥川龍之介の『羅生門』を原文と突き合わせな

がら、「この言葉はこんな意味で、この単語はここにつながっているの」と説明していく。そのやり取りの中で、今まで何度も読んできた短編小説が、不意にひとつのすばらしく精巧な構造として立ち上がってきたときの驚きは忘れがたい。もちろん、文章を的確に捉えられる人が丁寧に読めば、日本語だけでも作品の機序を完璧に捉えることはできるに違いない。だがわたしにとっては、作家がすべての単語を無駄なく有機的に絡みあわせ、クライマックスに向けて文章を盛り上げていくその手つきを知ることができたのは、彼女の部屋でお茶を飲みながら二つの言語を往還したあの時間あってこそだった。

文学の話からは逸れてしまうけれども、母語でない言語は、D「もうひとりの自分」を発見させてくれることもある。フランスにいた頃、よく家事をしながらフランス語でひとりごとを言うことがあった。洗濯物をたたみながら、食器を拭きながら、あるいはくたびれて単にベッドの縁に腰掛けながら。そういう時に考えているのは大概、抱えていた様々な悩みごとだった。なぜそうなったのか、どうすればよいのか、何が悪かったのか。原因や解決法をぼんやり思案していると、ふと「本当の答え」が口から飛び出てくる。自分の愚かさ、認めたくない欠点、人から見えないように守ってきた心の柔らかな未熟な部分。とても直視に堪えないこうした自分の瑕疵（かし）が、外国語という「ガラスの壁」を通すことではじめて、検閲と抵抗をくぐり抜けて言葉になる。まるで檻（おり）に閉じ込められた小動物が外に出ようと身をよじっているうちに、狭い柵の間をするりと通り抜けてしまうように。母語は自分に近い「本当」の言葉で、外国語は後から学んだ「借り物」の言葉のように思えるが、実はその「借り物」の言葉こそが、まさにそのよそよそしさゆえに、心のもっとも奥ふかくに秘匿されている自己を――無惨なまでに――あらわにするのだった。

先に見たクレリエールという言葉は、森の空き地や布地の薄い部分の意から転じて比喩的な意味でも用いられる。ある辞書には「追憶の間隙」という用例が記されていた。ふと口をついて出た独言が剥（む）き出しにするX「もうひとりの自分」も、おそらくひとつのクレリエールだと言えるのだろう。意識と無意識の隙間に明滅し、E母語という手綱が手放されたときだけ束の間浮かび上がる心の「空き地」。それは決して光降りそそぐ明るい場所ではないけれども、そのようなほの暗い場所を自分のうちに見出し、認めるのは、不思議と静かな慰めを与えてくれる経験でもある。

注　パスカル……フランスの哲学者。「人間は考える葦である」という箴言でも知られている。

【文章Ⅱ】欲望と幻滅

ずっと欲しかったものをようやく手に入れたとき、ふと言いようのない虚しさを覚えることがある。心臓がすっと冷えるような、急に視界がモノクロになるような虚しさ。この虚しさは、自分のものとなったそれらが、欲望によって付与されていたヴェールを剥（は）ぎ取られ、単なる商品あるいは道具として生

身の現実をつきつけてくることによって生じるものなのだろう。虚しさや冷えるような感じの正体は、おそらく、欲望の対象が現実の次元に引き降ろされることによる幻滅である。幻滅――「幻」が「滅される」というこの卓抜な表現について考えると、ひとつの疑問に逢着する。なぜ、自分の所有下に入ったものは、急激に価値を減ずるように見えるのだろうか？ 「欲しいもの」が「欲しかったもの」になることで、何が起きるのだろうか？

この問いに対して、ルネ・ジラールの言う欲望の三角形を思い起こしてみることもできるだろう。いわく、わたしたちは欲望の主体として、その対象と直接関係を結ぶのではなく、しばしば他者という媒介のプリズムを通して欲望する、あるいは欲望させられる。「わたし」の欲望は、つねに誰かの欲望のトレースでしかない。そうだとすれば、欲しかったものが自分のものになったときに生まれる幻滅は、「わたし」が模倣したいと願う何者かが、もはや欲望の主体と対象を媒介してくれなくなったことによって生じるものだ。わたしたちは「それ」が欲しかったわけではなく、本当は「それ」を欲することによって、自分ではない何者かになろうとしていたのだ。だが、所有物となってしまった「それ」は、自分を自分でないものにしてくれるものなどない、という厳然たる事実をわたしたちに突きつけてくる。幻滅は、「わたし」が「わたし」であるほかないことの失望と分かちがたく結びついている。

プルーストという作家に惹かれ続けているのは、彼がこうした幻滅のメカニズムをコクメイに描き出しているからなのだと思う。全七篇からなる畢生の大作『失われた時を求めて』には、「スワン家のほうへ」（第一篇）、「ゲルマントのほう」（第三篇）という不思議なタイトルがつけられたテクストがある。『失われた時を求めて』という大長編にひとつの流れを作り出しているのは、この「ほう」である。作中の「語り手」は、絶えずなにかに憧れ、引き寄せられ、しかし憧れの対象が自分の手の届く存在となった瞬間に、それを取り巻く現実に触れて幻滅する。幼い頃に彼を魅了するのは富裕なブルジョワディレッタントのスワンの暮らしであり、青年期にはその関心は大貴族のゲルマント公爵一家へと移ってゆく。海辺の保養地バルベックのように、土地そのものが憧れの的となることもある。欲望の対象の「ほう」に寄せては引く憧れの波は、作品全体に響く通奏低音だと言ってもよい。

興味深いのは、「語り手」の憧れがしばしば恋を伴うことだ。メゼグリーズのほう、つまりスワンのほうには、サンザシの咲き乱れる生け垣のもとにいたスワンの娘、ジルベルトがいる。ゲルマントのほうには、エレガントな装いや生活によって「語り手」を魅了するゲルマント公爵夫人がいる。海辺の保養地バルベックのほうには、彼を翻弄する謎めいた少女アルベルチーヌがいる。そしてこれらの恋と憧れは、かならず幻滅によって終わる。あれほど近づきたいと切望したゲルマント公爵夫人のいる貴族の社交界は、虚栄心に満ちあふれ、人々が退屈さに倦み果てている場所だった。スワン家の人々についても、その凡庸さは作品のなかで次第に明らかになってゆく。とりわけアルベルチーヌとの恋愛は、この「憧れ／幻滅」の対を戯画的なまでに際立たせている。彼女が恋人になった瞬間に彼の恋はほとんど冷めてしまい、以後、彼の欲望は猜疑心と嫉妬によってしか掻き立てられることがない。そして明日こそは別れを告げようと語り手が決意した翌日に彼女は忽然と姿を消し、ほどなくして落馬事故によって死んでしまうのだ。出奔と死によって手遅れになってから、語り手は再び狂おしく恋人を求めだす。

プルーストにおいて欲望はつねに呪われている。そこには、届かないままに自分の身を焦がす憧れか、さもなくば現実への幻滅しかない。幻が手を触れたら破れるシャボン玉のようなものである以上、どちらの「ほう」に行っても、自分をすっかり満足させてくれるものはない。長いヘンレキ[エ]の果てに「語り手」はそのことを苦い思い出とともに学ぶことになるだろう。

だがプルーストは、「わたし」が「わたし」であるほかないこの世界にあっても、「今、ここにいる自分」という軛(くびき)からのがれる術をも教えてくれている。書き継ぐこと、作品をつくることで、人は第二の生を生き直すことができる――『失われた時を求めて』が最後にわたしたちに見せてくれるのは、そのようなビジョンなのだから。そしてこのことは、書くことだけではなく、読むことにも当てはまるように思う。彼が『サント＝ブーヴに反論する』[*]で言うように、「美しい本は一種の外国語で書かれて」おり、わたしたちの各々がそれらを読むとき、ひとつひとつの語に、「しばしば誤読」ではあるのだが、しかし「美しい誤読」であるような意味やイマージュを付与するのだとしたら、読むという営みも紛れもなく創作行為であるのだから。思えば、買ったときに虚しさの感覚を生じない数少ないもののひとつが書物である（少なくともわたしにとっては）。読まれることを静かに待っている本[Y]は、「わたし」を「わたし」の裡(うち)に閉じ込める代わりに、いつでも新しい世界へ誘いだそうとしている。所有しても熟読吟味しても、決して完全に自分の支配下に置かれることがない書物は、その届かなさゆえに憧れのきらめきを失わずにいる。

注　ルネ・ジラール……フランス出身の文芸批評家。
トレース……引き写し。
プルースト……フランスの小説家。
ブルジョワディレッタント……ここでは裕福な美術品蒐集家のこと。
スワン、ゲルマント、ジルベルト、アルベルチーヌ……いずれも『失われた時を求めて』の登場人物。
バルベック、メゼグリーズ……いずれも『失われた時を求めて』に出てくる地名。
サンザシ……庭木の一種。
『サント＝ブーヴに反論する』……プルーストの評論。文芸評論家サント＝ブーヴの主張に対して異を唱え、『失われた時を求めて』を執筆するきっかけとなった。

問一　二重傍線部ア～エの漢字をひらがなに、カタカナを漢字に改めなさい。

問二　傍線部Aについて、母語でないテクストを読むときの「遅さ」にはどのような「意義」があるのか。【文章Ⅰ】の言葉を用いて答えなさい。

問三　傍線部Bが指す内容を答えなさい。

問四　傍線部Cについて、文学作品の輪郭が鮮明に見えるとはどのようなことか。これを具体的に説明した部分を【文章Ⅰ】から五十五字で抜き出し、最初と最後の五字を示しなさい。

問五　傍線部Dとほぼ同じ意味の表現を【文章Ⅰ】から二〇字で抜き出しなさい。

問六　傍線部Eについて、筆者は母語をどのようなものとして捉えているのか。わかりやすく説明しなさい。

問七　傍線部X・Yにあるように、【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】ではともに「わたし」（自分／自己）という存在のありように焦点が当てられている。筆者にとって「わたし」とはどのような存在だと捉えられているのか。次の条件①～③に従って述べなさい。

条件①　おのおのの文章の趣旨を、「わたし」という存在のありように注目して示すこと。

条件②　二つの文章の趣旨を踏まえ、両者に共通する筆者の考えを述べること。

条件③　解答欄に収まる範囲で、読みやすく記述すること。

二　次の文章を読んで後の問いに答えなさい。（設問の都合上、本文の表記を改変した箇所がある。）（30点）

今は昔、河内国に、いみじう*不合なる女の、知れる人もなく、ただ一人ありけり。すべき方もなかりければ、「*たをと買わん」といふものを呼びて、*筵も、笠、尻切なども、取りて過ぐる程に、その日といふこともなければ、又も言ふを呼びつつ、よろづの人の物*を取りつつ使ひける程に、「二十人に*言承けをしてけり」と思ふに、いといとあさましく、「さは、おのづから同じ日も来て呼ばば、いかがせむずらん。一日に五所も呼ばば、いかがせんずらん」と思ひ嘆きつつ過ぐす程に、夕さりは叩きて呼ぶ人あり。「誰そ」と言へば、「明日、田植ゑんずるなり。つとめてはまた疾く疾くおはせ、*そこそこなり。これよりいとなし」とて往ぬ。「先づかく言ふ所へこそは行かめ」と思ふ程に、又うたて、同じやうに言ふ。「あなわびし。いかがせん。又かく来てや言はむ」と思ひて、「A隠れもせばや」と思へど、隠るべき方もなし。「いかがはせむ」とて、ただ「あ*」と言承けをしゐたり。「さりとも、同じ日はさのみやは言はむ」と思ひてある程に、二十人ながら、「明日」「明日」とただ同じやうに言ふに、いといとあさまし。「さりとも、かく同じ日しもやはとこそ思ひつれ。いとあさましきわざをもしつるかな」と、「一所は往なむず。残りのつとめ、いかに言はむずらん」と思ひやるかたなきままに、年ごろ一尺ばかりなる観音を作りたてまつりて、厨子に据ゑまゐらせて、食ふ物の*最花を参らせつつ、「大悲観音、助け給へ」と言ふよりほかにまた申すこともなかりければ、厨子の前にうつぶし臥して、よろづわびしきままに、「かかる言承けし候ひて、いま十九人の人に言ひ責められんがわびしきままに、いづちもいづちもまかりやしなましと思ひ候へども、年ごろ頼みまゐらせたる仏を捨てまゐらせては、B*いかがはまからん。又人の物を取り使ひては、いかでかただにては止まむ。*やうやうづつもこそはし候はめと思ひ候ふを、いかが候ふべき」と泣き臥したる程に、夜明けぬれば、「さりとてあらんやは」とて、初め呼びし所へ往ぬ。「疾く来たり」とて喜び、*饗応せらるアれども、心には、「残りの人々もいかに言ふらん。呼びにや来らん」と思ふに静心なし。

日暮らし植ゑ困じて、夕方帰りて、仏うち拝みまゐらせて、より臥したれば、戸をうち叩きて、「これ開け給へ」と言ふ人あり。「残りの所より、来ずとて、人の言ひに来たるにや」と思ふ程に、「今日、年老い給へる程よりは、五六人がところを、あさましくまめに、疾く植ゑ給ひつれば、同じことなれど、嬉しくなむある。困ぜられイぬらん。これ参れとあるなり」とて、*御膳を一前いときよげにして、桶にさし入れて、持て来たり。

C心やすくなりてあるに、又同じやうに戸をうち叩きて、ありつるやうに言ひて、物を持て来たり。その度は心得ず思ふに、又同じやうに叩けば、「いかにいかに」と思ふに、ただ同じ事を言ひて、門をもえ立てもあへぬ程に持て集ひたるを見れば、二十人になりたり。心得ず思へど、「いかがはせん」とて、よき魚どもなどあれば、物よく食ひて、「観音のせさせ給へることなめり」と嬉しくて、寝たる夜の夢に見るやう、「己れがいたくわび嘆きしがいとほしかりしかば、いま十九人が所には、我たしかに植ゑて、清く真心に歩きつる程に、我も困じにたり」とて、D苦しげにて立たせ給へりと見て、覚めぬ。あはれに悲しく貴くて、仏の御前に額に手を当てて、うつぶし臥したり。

とばかりありて、見上げたれば、夜も明けにけり。「明(あか)くなりにけり」とて、厨子の戸を押し開けたれば、仏を見たてまつれば、腰より下は泥に浸りて、御足も真黒にて、左右の御手に苗をつかみて、苦しげにて立たせ給へるに、悲しといふもおろかなり。「わが身のあやしさに、かく苦しめまゐらせたる事。又かく歩かせまゐらせ、[E]あはれに悲しく、貴さ」など思ふに、涙せきとどむべきかたもなくてあめとふりける。

（『古本説話集』より）

注　不合……貧乏なこと。

たをと買はん……「たをと」は「たひと・たうと（田人）」の転。田植え女として契約しようの意味。

筵も、笠、尻切など……筵は田植え時の雨具。筵、笠、尻切は田植えの身支度の品。

物を取りつつ使ひける……食物・米など田植賃として前もって受け取ったものを使った。

言承け……口約束をすること。

そこそこなり……田植えの場所はどこどこの田です。

あ……「はい」という返事。

最花……その日の最初の食物を神仏に供えること。

やうやうづつもこそはし候はめ……少しずつでも仕事をして償いましょう。

饗応……食べ物の用意をしてもてなすこと。

御膳を一前……食べ物を載せたお盆を一つ。

問一　二重傍線部ア「らるれ」、イ「られ」、ウ「つる」について、それぞれの助動詞の文法的意味と活用形を答えなさい。

問二　傍線部A「隠れもせばや」とあるが、(1)傍線部の意味を答え、(2)このように言った理由を書きなさい。

問三　傍線部B「いかがはまからん」とあるが、この言葉には女のどのような気持ちが表れているか、答えなさい。

問四　傍線部C「心やすくなりてある」とあるが、どうして「心やすく」なったのか、説明しなさい。

問五　傍線部D「苦しげにて立たせ給へり」とあるが、誰がなぜ「苦しげ」なのか、説明しなさい。

問六　傍線部E「あはれに悲しく、貴さ」という言葉に女のどのような思いが込められているか、答えなさい。

三　次の文章は、漢の劉邦が項羽との争いに勝ち、天下を平定した後の出来事を記したものである。よく読んで後の問いに答えなさい。（設問の都合上、送り仮名を省略したところがある。）（20点）

漢五年、既殺項羽、定天下、論功行封。群臣争功、歳余功不決。高祖以蕭何功最盛、X封為鄼侯、所食邑多。功臣皆曰、「臣等身被堅執A鋭、多者百余戦、少者数十合、攻城略B地、大小各有差。今蕭何未C嘗有汗馬之労、徒持文墨議論、不戦。顧反居臣等上、①何也」。高帝曰、「諸君知猟乎」。曰、「知之」。「知猟狗乎」。曰、「知之」。高帝曰、②「夫猟、追殺獣兎者狗也。而発蹤指示獣処者人也。今諸君徒③能得走獣耳。功狗也。至如蕭何、発蹤指示。功人也。且諸君独以身随我、多者両三人。今蕭何挙宗数十人皆随我、功不可忘D也」。群臣皆④莫敢言。

（『史記』より）

注　論功行封……臣下たちの功績を評定し、領土を与える。「封」は土地を与えて諸侯とすること。
高祖……劉邦を指す。後文の「高帝」も同じく劉邦をいう。
蕭何……人名。劉邦の臣下の一人。
酇侯……酇の侯爵。酇は地名。
所食邑……治める領地。
被堅……よろいかぶとを身につける。
発蹤……縄を解いて猟犬を放つ。
挙宗……一族を挙げて。

問一　傍線部①～④の文中における読み方を、送り仮名も含めてすべてひらがなで記しなさい。（仮名遣いは新旧どちらでもよい。）

問二　傍線部A・Bの文中における意味を答えなさい。

問三　傍線部Cをわかりやすく現代語訳しなさい。

問四　傍線部Dを書き下し文に改めなさい。（仮名遣いは新旧どちらでもよい。）

問五　劉邦が蕭何の功績を二重傍線部X「最盛」としたのはなぜか。本文全体を踏まえて答えなさい。